

論文

## 雲南チベット文化圏におけるカムチベット語の「ごはんを食べる」

鈴木博之  
復旦大学

### ‘Eat meal’ in Khams Tibetan in the Tibetosphere of Yunnan

SUZUKI, Hiroyuki  
Fudan University

**Abstract:** This article deals with a geolinguistic analysis of two words, ‘meal’ and ‘eat’, and an expression ‘eat meal’ in Yunnan Tibetan (Khams). In Literary Tibetan, the verb *za* ‘eat’ generally takes a cognate object *za ma* ‘meal’. However, in Yunnan Tibetan, the phenomenon of the cognate object is not pervasive. The linguistic map for ‘meal’ shows that all the varieties use *zan*, with the exception of a single variety, Daan, which uses *za ma*. The linguistic map for ‘eat’ displays that there are two roots, *za* (literally ‘eat’) and ‘*cha*’ (literally ‘chew’), exhibiting a continuous distribution: east (‘*cha*’) and west (*za*). Consequently, the linguistic map for ‘eat meal’ almost follows the distribution of the word form for ‘eat’. The word form for ‘eat’ is related to the dialect classification in most cases. The word form corresponding to *za* is principally used in the sDerong-nJol group, whereas that corresponding to ‘*cha*’ is principally used in the Sems-kyi-nyila and Chaphreng groups. From this perspective, it is noteworthy that the sPomtserag dialect (sDerong-nJol) uses ‘*cha*’, and that the Melung dialect (Sems-kyi-nyila) uses *za*. The article gives an interpretation on the case of the sPomtserag dialect, which genetically belongs to the sDerong-nJol group but has received a strong influence from varieties of the Sems-kyi-nyila group.\*

**キーワード:** チベット系諸言語 ; カムチベット語 ; 語彙対応 ; 方言分類 ; 同族目的語

**Keywords:** Tibetic languages; Khams Tibetan; lexical correspondence; dialect classification; cognate object

---

鈴木博之 (2021) 「雲南チベット文化圏におけるカムチベット語の『ごはんを食べる』」 『地理言語学研究』 1: 41–50. doi: <https://doi.org/10.5281/zenodo.5529260>

\* 本研究に際しては、2017-2020年度日本学術振興会科学研究費補助金若手研究(A)「チベット文化圏東部の未記述言語の解明と地理言語学的研究」(研究代表者: 鈴木博之、課題番号17H04774) および2018-2020年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(B)「高精細度広域地図による中国および隣接する多言語地域の地理言語学的研究」(研究代表者: 遠藤光暁、課題番号18H00670)の援助を受けている。

## 1. はじめに

本稿では、雲南省に分布するカムチベット語の「ごはんを食べる」という表現を地理言語学的に分析する。具体的には、「ごはん」と「食べる」という2つの語とそれを組み合わせて表される「ごはんを食べる」という表現について、計3枚の言語地図を作成し、その分布について考察する。

チベット系諸言語において、「ごはんを食べる」という表現で広く認められる表現は、(1)のようである<sup>1</sup>。

- (1) *za ma*                      *za*  
       ごはん                      食べる  
       ごはんを食べる

(1)の「ごはん」の形式の第1音節 *za* は、動詞 *za* 「食べる」と共通し、接尾辞 *ma* を伴い名詞へと派生したものと考えられる。このため、構造的には同族目的語<sup>2</sup>を伴う表現となる。しかし、「ごはんを食べる」という表現については、同族目的語を取ることが義務的ではなく、たとえばラサのチベット語では、(2)のような表現が日常的である。

- (2) *kha lag*                      *za*  
       ごはん                      食べる  
       ごはんを食べる

さらに、これに相当する敬語表現もあり、「ごはん」も「食べる」も異なる語形を用いる。「ごはん」に相当する語には、ほかにも *lto* 「食べ物（特に炊いた米）」が認められる。「ごはんを食べる」という表現は、「ごはんを食べたか？」という形式で、一種のあいさつ語として機能している。

本稿では雲南省で話されるカムチベット語（以下、簡略化して「雲南チベット語」と呼ぶ）を対象にするため、(2)のような表現は認められない。ただし、「ごはん」も「食べる」も複数の語形式が用いられ、それは必ずしもこれまでに報告されている方言区分（たとえば Suzuki 2018；付録参照）とは一致しな

<sup>1</sup> 本文中で言及する語形は、特に発音を示す意図があるときを除いて、対応するチベット文語形式のローマ字翻字 (de Nebesky-Wojkowitz 1956) で表す。また、例文においては、絶対格や意思など表すゼロ形態における語積は行わない。

<sup>2</sup> 直訳では、「食べ物を食べる」というようになる。チベット系諸言語では、ほかにも *rtsed mo rtse* 「遊ぶ（直訳：遊びを遊ぶ）」や *rmi lam rmi* 「夢を見る（直訳：夢を夢見る）」など、いくつか見られる (Tournadre & Suzuki 2021)。

い。このことから、語形式と方言所属の間に何らかの関連を認めることが可能であるか否か、言語地図を作成しつつ検討を進めていくことにする。

## 2. 語形式と言語地図

本節では、雲南チベット語諸方言における「ごはん<sup>3</sup>」、「食べる」、「ごはんを食べる」について、それぞれ形式を記述し、ArcGIS online を用いて言語地図を作成し、地理的分布について考察を加える。

### 2.1. 「ごはん」

雲南チベット語諸方言には、次の2種類の文語形式に対応する語が「ごはん」の意味で用いられる。

- *zan*
- *za ma*

いずれも、動詞 *za* 「食べる」から派生したものである<sup>4</sup>。両者は同一方言において混在しないと考えられるが、商業地や職場など異なる地域の出身者と頻繁に交流がある状況においては、2つとも口語形式として現れる。しかしながら、方言形式としては、図1が示すように、ほぼ *zan* の対応形式が認められる。

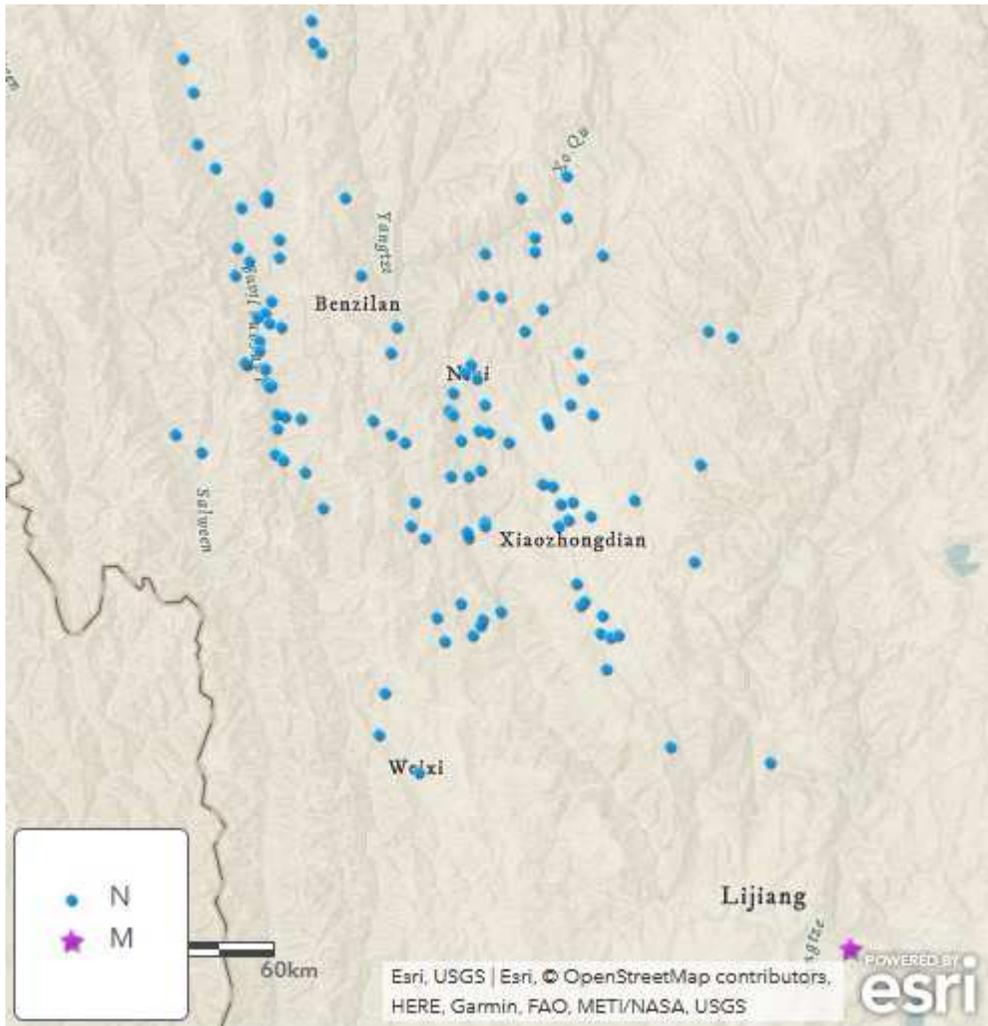
一方で、*zan* の対応形式が「ごはん」全般を指す総称であるのに対し、*za ma* の対応形式が「夕飯」という限定された意味で用いられる地点もある。これについては、本稿では取り上げない。

雲南チベット語諸方言では、*zan* の対応形式が広く使用される（図1）が、その音形式はさまざまである。初頭子音の形式を見ると、*/s/*がもっとも多くの地点で使用され、少数派に */c/* や */ʎ/* が認められる。*/c/* は、たとえば Myigzur（尼汝）方言で */c̥/* という形式で現れる。初頭子音が、後続母音 */e/* の性質によって前部硬口蓋音に変化したと考える<sup>5</sup>。*/ʎ/* は、たとえば mBalhag（巴拉）方言で */ʎ̥/* という形式で現れる。この方言では、初頭子音字を表すチベット文字 *s, z* に対して */ʎ/* が規則的に対応する（Suzuki 2013）ため、同形式は *zan* の音対応として成立する。

<sup>3</sup> 本節で検討する語義の「ごはん」は「調理された食べ物」の総称とし、米飯に限らない。

<sup>4</sup> 文語では、*za ma* と *zan* は「ごはん」を表すほか、後者は特に「ツァンバ（麦こがし）をこねたもの」という、特定の食べ物を表す（張怡蓀 編1985:2451）。ただし、雲南のチベット文化圏の言語状況を反映している可能性のあるDTLF (1899:867)は、*zan* について「東チベットでは動物のために用いられ、他の地域では人間のためにも用いられる」と記述している。この記述は少なくとも現在の雲南チベット語とは一致しない。

<sup>5</sup> この音変化の類型については、鈴木(2018)を参照。



凡例：N=文語 $zan$ 対応形式；M=文語 $za\ ma$ 対応形式

図1：「ごはん」の語形式

図1が示すように、 $za\ ma$ の対応形式を用いる地点は、南東端の1地点（大安）のみである。この方言は、所属がSems-kyi-nyila（香格里拉）方言群維西塔城下位方言群であるが、その話者の来歴は現在のチベット自治区昌都市芒康県にあたる地域（本地図外の北西部に接続する地域）であるという（鈴木2016）。芒康県のカムチベット語では、「ごはん」に $za\ ma$ の対応形式を用いる地点が多い<sup>6</sup>。しかし、両者に直接の関係があるとは判断できない。というのも、 $za\ ma$

<sup>6</sup> 筆者のフィールドノートによる。

という形式がチベット系諸言語において広範に分布しているからである。共通する語彙形式の使用が、共通の改新に由来するとは言えないのである。

## 2.2. 「食べる」

雲南チベット語諸方言には、次の2種類の文語形式に対応する語が「食べる」の意味で用いられる<sup>7</sup>。

- ・ *za*
- ・ *'cha'*

動詞 *za* は文語や多くのチベット系言語において「食べる」の語義で用いられる。動詞 *'cha'* は文語では「噛む」の意味で用いられる。雲南以外でも、この形式を「食べる」の意味で用いる言語が、限定的ではあるが、存在する<sup>8</sup>。両者のうち、*'cha'* の対応形式には、初頭子音に複数の音形式が認められる。分布地点数の観点から見れば、そり舌破擦音  $ʃ^{h/}$  に対応するものが最も多く、次いで前部硬口蓋破擦音  $tʃ^{h/}$ 、硬口蓋閉鎖音  $ʃ^{h/}$  に対応する地点が続く。これらはすべて当該地点における通常の音対応として理解でき、各地点で例外的な音対応を示しているものは、現時点では未確認である。

図2が示すように、*za* の対応形式と *'cha'* の対応形式を用いる地点は、金沙江（図2上の Yangtze）沿岸を基準に東西に分かれる。また、分布に飛び地がなく、それぞれの分布範囲に地理的な連続性を認めることができる。注目すべきは、この分布と方言区分が一致しない点である。雲南チベット語諸方言の分類については、Suzuki (2018) に最新の見解があるが、基本的に *'cha'* の対応形式は Sems-kyi-nyila 方言群に属する諸方言が用いるものと考えられる。

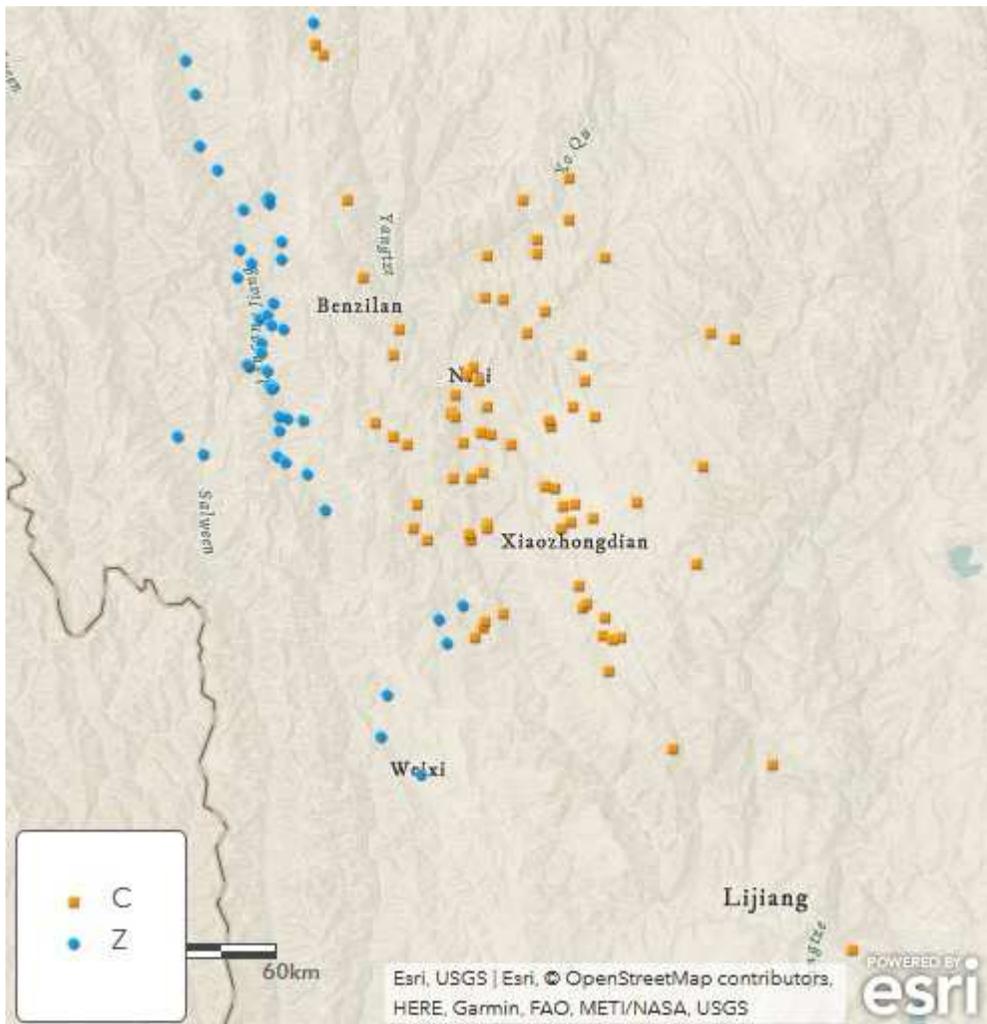
この点から考えると、特に2つの地点について注意が必要である。1つは、図2中部の sPomtserag（奔子欄）方言（図2上の Benzilan 一帯）が *'cha'* の対応形式を用いるが、方言区分としては sDerong-nJol（得榮徳欽）方言群に属する。奔子欄の西は険しい山脈（白芒雪山；雲嶺山脈の一部）があり、交通路が通じてはいるものの、往時の往来が頻繁であったとはいえない。奔子欄は「茶馬古道」の要衝であったとされるが、その交通路は金沙江に沿って南北に通じていた。言語圏として見ると、奔子欄は Sems-kyi-nyila 方言群の分布域からの影響を長く受けてきたと見られる。このことが sPomtserag 方言に影響を与えたことを考えることは不可能ではない。

もう1つは、図2中央南部の維西県（図2上の Weixi 周辺）で、2つの語形式が接するように分布する地域（塔城鎮）である。同地域において、*za* の対応形式も *'cha'* の対応形式も Sems-kyi-nyila 方言群に属する方言になるが、前者が

<sup>7</sup> 「食べる」については、Suzuki (2018:94) で取り上げた。本稿図2では、その発表以降に調査した方言資料も含めて地図化する。

<sup>8</sup> たとえば、阿壩州の松潘県で話されるヒャルチベット語など（鈴木2007, 2009）。

Melung（維西塔城）下位方言群に属し、後者が東部雲嶺山脈下位方言群に属する。この両者は音体系に非常に大きな異なりがあるが、チベット文語形式との音対応を見れば、歴史的に関連づけることができる。



凡例：Z=文語 $za$ 対応形式；C=文語' $cha$ '対応形式

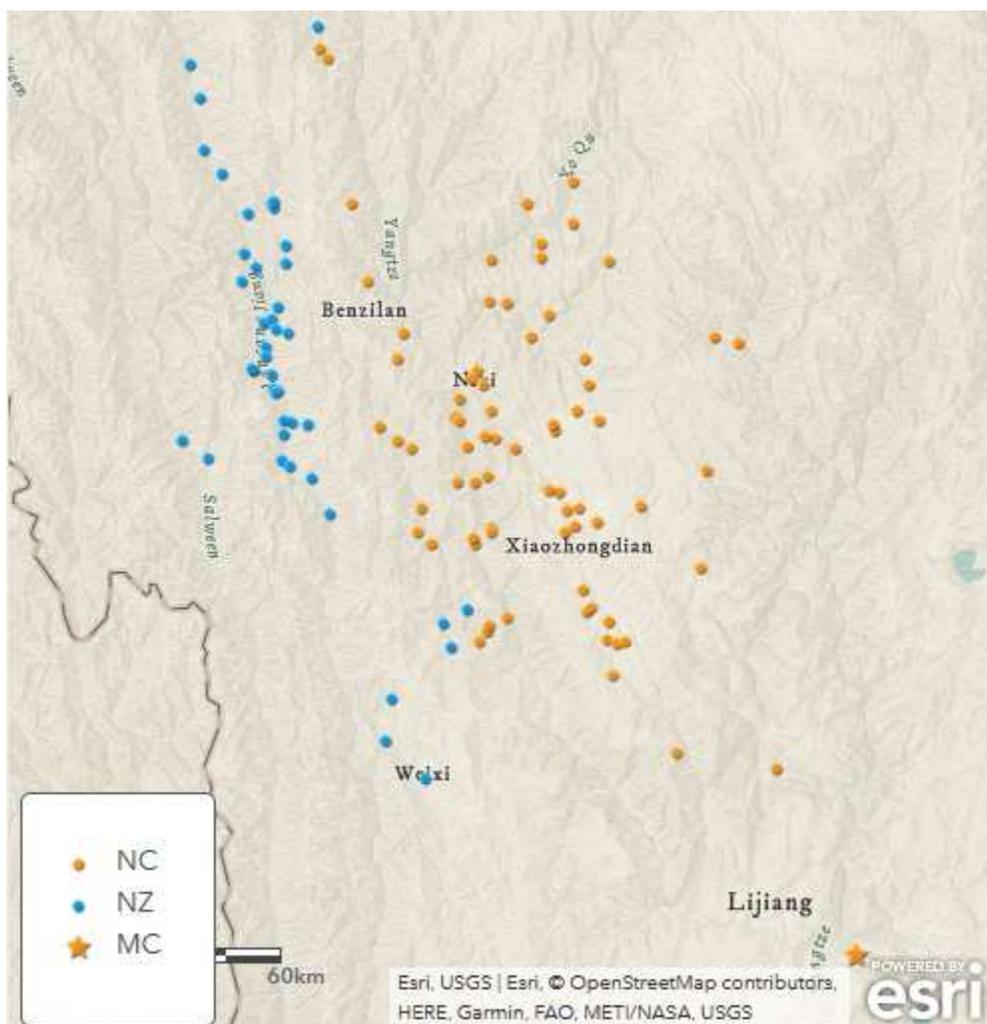
図2：「食べる」の語形式

Melung 下位方言群の諸方言は  $za$  の対応形式を用いるが、例外として、大安方言（図2南東端）がある。2.1 でも述べたように、大安方言話者の祖先の来歴は本地図外の北西にあたる地域からの移民であり、 $za$  の対応形式を用いる

方言群の地域に本来の言語域があったと考えられるが、この背景とは異なって、'cha'の対応形式を用いる。これに説明を与えられる背景は、現段階では見いだせていない。

### 2.3. まとめ：「ごはんを食べる」の言語地図

先に検討した「ごはん」と「食べる」を組み合わせによる「ごはんを食べる」という表現（例文(1)を参照）を1枚の言語地図で表したものが、図3となる。



凡例：NC=文語 *zan 'cha'* 対応形式；NZ=文語 *zan za* 対応形式；MC=文語 *za ma 'cha'* 対応形式  
図3：「ごはんを食べる」の言語地図

図3が示すように、雲南チベット語諸方言については、「ごはんを食べる」というのが同族目的語をとる表現になるのは、ほぼ西半分の地域で用いられる方言に限られる。図3は分布上ほぼ図2と変わらないが、動詞の形態をテーマにしている(図2)か動詞と目的語の関係をテーマにしているか(図3)という異なりは、地図作成上の観点では区別がある。また、'cha'の対応形式からその名詞が派生していない、すなわち新たな同族目的語を生み出していないことも注目に値する。

### 3. まとめ

本稿では、雲南チベット語諸方言における「ごはんを食べる」という表現と、それを構成する名詞「ごはん」と動詞「食べる」を地図化し、その分布について分析した。

文語形式 *za ma za* 「ごはんを食べる」に対応する形式は、雲南チベット語諸方言では認められず、また、これと類似する *zan za* 「ごはんを食べる」という表現が半数を占めることが明らかとなった。一方、建塘鎮を中心とする地域で、Sems-kyi Nyila 方言群および Chaphreng 方言群に属する諸方言では、*zan 'cha'* 「ごはんを食べる(逐語訳：ごはんを噛む)」が用いられることが分かる。

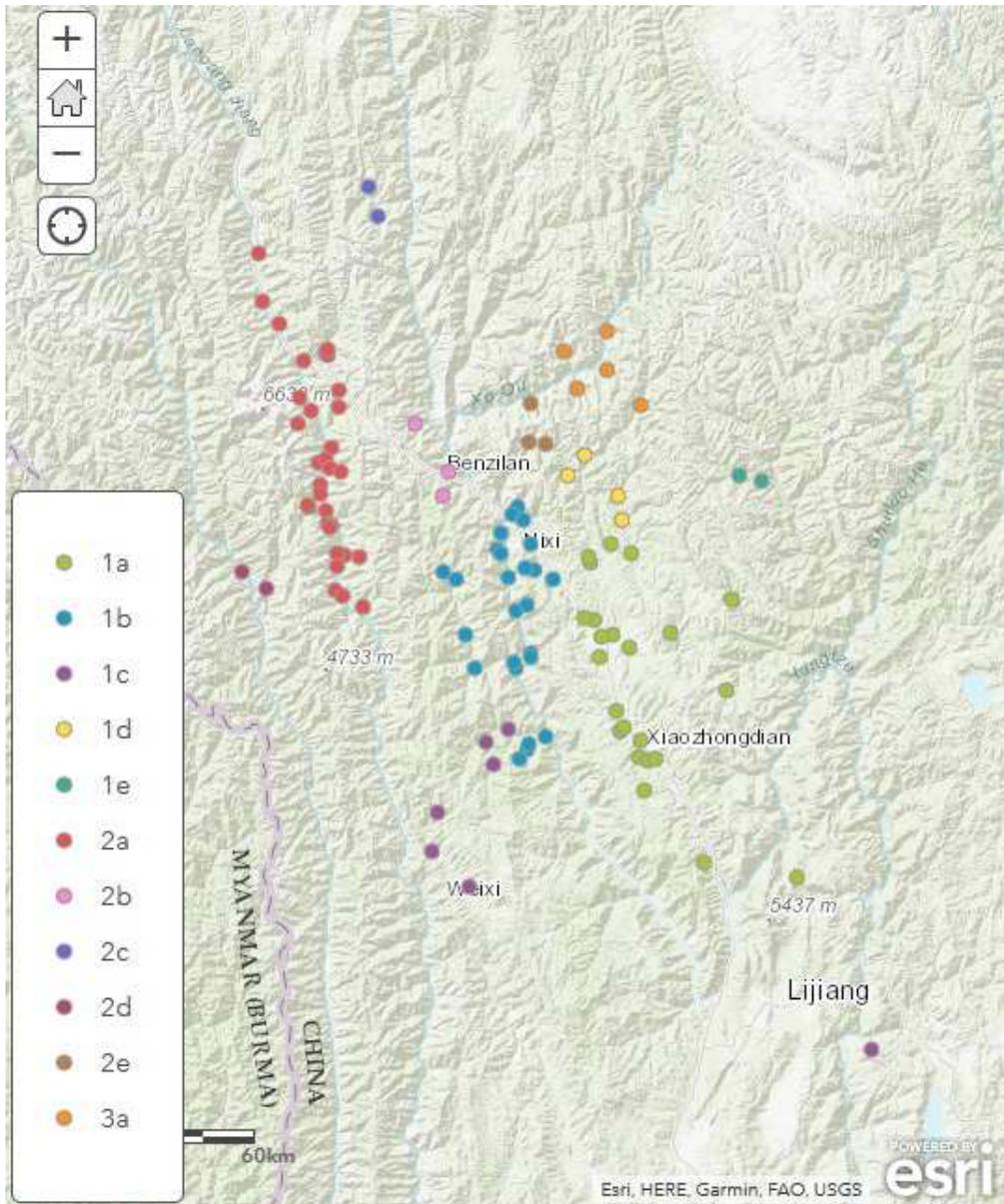
また、方言区分と語形式にずれが認められる地域として、奔子欄と維西塔城に注目し、現象を説明したのち、前者については言語圏と方言分類が交錯する背景について解説を加えた。

### 付録

Suzuki (2018:13-14)による雲南チベット語の分類を以下に掲げる。

1. Sems-kyi-nyila (香格里拉) 方言群
  - a. rGyalthang (建塘)
  - b. East Yunling Mountain (雲嶺山脈東部)
  - c. Melung (維西塔城)
  - d. dNgo (翁上)
  - e. Lamdo (浪都)
2. sDerong-nJol (得榮德欽) 方言群
  - a. West Yunling Mountain (雲嶺山脈西部)
  - b. sPomtserag (奔子欄)
  - c. gYagrwa (羊拉)

- d. Bodgrong (丙中洛)
- e. mBalhag (巴拉)
- 3. Chaphreng Tibetan (郷城) 方言群
  - a. gTormarong (東旺)



## 参考文献/References

- 鈴木博之 (2007) 「川西民族走廊・チベット語方言研究 チベット語方言分類語彙資料集」京都大学博士論文別冊資料. doi: <https://doi.org/10.14989/doctor.k12734>
- 鈴木博之 (2009) 「川西民族走廊・チベット語方言分類語彙集」長野泰彦編『チベット文化圏における言語基層の解明—チベット・ビルマ系未記述言語の調査とシャンシュン語の解読(No. 16102001) 研究成果報告書』 Vol.2: i-xxii + 1-457 国立民族学博物館. URI: <http://hdl.handle.net/10502/4342>
- 鈴木博之 (2016) 〈丽江永胜县大安藏语的来历初探: 通过与纳西族的接触如何演变〉《藏学学刊》14: 250–263.
- 鈴木博之 (2018) 「カムチベット語rGyalthang下位方言群における歯-歯茎音の前部硬口蓋化現象とその周辺」『言語記述論集』10: 1–11. URI: <http://id.nii.ac.jp/1422/00001999/>
- 張怡蓀 編 (1985) 《藏漢大辭典》北京: 民族出版社.
- DTLF = Les Missionnaires Catholiques du Thibet (1899) *Dictionnaire tibétain-latin-français*. Hong Kong: Imprimerie de la Société de Missions Étrangères.
- Suzuki, Hiroyuki (2013) Extraordinary sound development of \*s and \*z in mBalhag Tibetan (Shangri-La, Yunnan). *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 36.1: 101–110. doi: <https://doi.org/10.15144/LTBA-36.1.101>
- Suzuki, Hiroyuki (2018) *100 linguistic maps of the Swadesh word list of Tibetic languages from Yunnan*. Fuchu: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa. URI: [https://publication.aa-ken.jp/sag\\_mono3\\_tibet\\_yunnan\\_2018.pdf](https://publication.aa-ken.jp/sag_mono3_tibet_yunnan_2018.pdf)
- Tournadre, Nicolas and Hiroyuki Suzuki (2021) *The Tibetic languages: An introduction to the family of languages derived from Old Tibetan*. (with the collaboration of Xavier Becker and Alain Brucelle for the cartography). Paris: LACITO Publications (CNRS).

## 出版情報

投稿受理日: 2021年4月30日

採用決定日: 2021年5月14日